

トップの決断

北の
経営者たち

1996年9月。福岡への出張途上、新幹線で鳴り響いた車内放送の呼び出しが、受難の始まりだった。自身が社長を務める玄米酵素(札幌)本社からの緊急連絡だった。

「大変です。全社に警察の強制捜査が入っています」

発酵させた玄米に大豆を加えた主力の健康補助食品「ハイ・ゲンキ」に、許可を得ず甲状腺ホルモンを入れ販売したという薬事法違反容疑。「健康食品にホルモン混入」とマスコミも一斉に報じた。「冤罪だ」。まったく身に覚えがなかった。独自に公的機関へ検査を依頼し、製品からホルモンが検出されないことを確認。捜査に対し「入手が困難で高価なホルモンを、製品に混ぜるメリットがない」と主張した。

生産停止で赤字

だが、石狩管内当別町の工場が家宅捜索で差し押さえられたため、生産が一時ストップ。約12万人いた顧客は8万人まで減り、赤字転落した。「玄米酵素はつぶれる」とうわさされた。経費削減のため役員報酬を3割下げた。だが、社員の給料には手を付けず解雇もしなかった。「これを取り越えれば会社が強くなる」。その一念だった。バブル期に投機に走らなかつたため、幸い数億円の余裕資金があった。

捜査は異例の結末を迎える。97年9月、自身と、法人としての玄米酵素などが書類送検されたが、札幌地検が2カ月後に嫌疑不十分で不起訴処分を決定した。ホルモンを混入させた証拠が見つからなかったのだ。

安堵する以上に、「これからまた多くの人に製品を届けたい」との思いを強くした。風評被害を払拭するため、次々と対策を打ち出した。

生産工程の透明化を目指し、工場で品質管理の国際規格「I

「冤罪」の強制捜査、品質アップで風評被害払拭



「困難は会社を強くする」と経営哲学を話す岩崎さん

玄米酵素会長

いわさき 岩崎

てるあき 輝明さん(67)

44年、札幌市生まれ。月形に北海道酵素(札幌)を設立。食と健康財団(同)理事長や、高を2年で中退し、家業の建して社長に就任。77年に社名 NPO法人日本総合医学会を製造を経て札幌の繊維問屋を玄米酵素に変更した。12年(東京)理事長を兼務してに就職。71年に創業し、72年 5月から現職。一般財団法人。

健康食 届ける一念で

SO9001認証を2000年に取得。品質管理の専門家も新たに配置した。原料の道産化にも取り組んだ。以前は米国産を使っていた大豆を、価格が5倍の十勝産に変更。本州産だった玄米は、石狩管内新篠津村での契約栽培に切り替えた。

社内ではコスト増を伴う取り組みに異論もあったが、「品質を高め信頼を回復する」と譲らなかつた。努力は実り、顧客数は12万を回復。毎年5%の増加が続いている。5年後をめどに工場を新設する計画だ。玄米発酵食品入りの振りかけを発売するなど、新たな食べ方を提案する商品開発にも力を入れる。

高校を中退して就職した札幌の繊維問屋で猛烈に働き、21歳で課長に出世した。ところが、妻子も自分も体調がすぐれない。肉食中心の食事に問題があるのではと思ひ、健康に良いと

される玄米食を試したものの、かむのが大変で長続きしなかつた。そんな時出合ったのが、千葉県の研究者が開発した粉末状の玄米発酵食品だった。取り寄せて食べ始めると家族の体調が劇的に改善した。「これを世の中に広めたい」。思い立ち71年、26歳で創業した。

当初は経営ノウハウも皆無。信頼していた役員が離反し、別の会社を設立する「内紛」も味わった。経営者として自らを鍛えるため、多くのビジネス書を読み、人から話を聞いた。たどりついたのが「利益は最後についてくる」という理念。社員には常に、「社会貢献が大切だ」と呼びかけている。

「米なら玄米、魚なら小魚。食材は丸ごと食べるのがいい」「自分が住む土地の食材が一番」。取材を始めると健康食の話が次々飛び出して、なかなか事業の話にならない。「あくまで食事が大切。それを手軽に補えるのが玄米発酵食品です」と笑う。自身が健康を取り戻した経験に裏打ちされているだけに説得力があった。

取材を終えて

(幸坂浩)

全国でセミナー

健康補助食品を売るだけでなく、食事そのものの改善を目指す「食事道」を説く。自身や社

次回はアサヒ商会(函館)社長の斎藤清人さんの予定です。

■玄米酵素	
▽本社	札幌市北区北12西1
▽創業	1971年
▽業種	健康補助食品製造・販売
▽資本金	1億円
▽売上高	52億5千万円(2011年12月期)
▽従業員数	92人